

二人の国会議長選出の真相

本日 6 日の朝日新聞夕刊は、ベネズエラの国会での議長選出について、このように報じました。全文を引用しましょう。

ベネズエラ新国会議長選出

南米ベネズエラで独裁的な支配を続けるマドゥロ政権と、米国などの支持を受けた野党勢力の対立が続くなか、同国国会で 5 日、新議長を選出する会議が開かれた。治安部隊が国会を包囲し、多数の野党議員が議場に入れないまま審議され、マドゥロ政権に近い議員が新議長に選出された。

暫定大統領就任を宣言したグアイド国会議長ら野党勢力は「議会クーデターだ」と反発。議場とは別の場所で、グアイド氏を改めて議長に選出した。

この日、国会を囲んだ治安部隊が、グアイド氏ら野党議員約 30 人のほか、地元配者や外国メディアを排除。一部のソーシャルメディアへの接続も制限された。

現地メディアなどによると、定足数に満たないまま新議長選出の審議が始まった。政府系メディアが、ルイス・パラ議員が国会議長就任を宣誓したと報じた。パラ氏は、政府の配給システムに絡んだ汚職に関わったとして、野党から追放された人物。2015 年の選挙では野党系が国会の 3 分の 2 以上の議席を獲得。だが、現地報道などによると、これまでに野党議員 27 人が亡命。ほかに約 30 人が議員特権を奪われ、当局に身柄を拘束されている議員もいる。
(サンパウロ)

サンパウロ発ですが、報道内容から岡田玄氏の記事でしょう。さらに時事通信も、このような配信を写真付きで行っています。

20.01.06 時事通信

グアイド国会議長の再選妨害 議場閉め出し、政敵を選出—ベネズエラのマドゥロ政権
2020 年 01 月 06 日 14 時 46 分

5 日、カラカスの議事堂への立ち入りを阻止されるベネズエラのグアイド国会議長（E P A 時事）

【サンパウロ時事】反米左派のマドゥロ大統領と、米政府の後押しで「暫定大統領」に就いたグアイド国会議長の



対立が続く南米ベネズエラで 5 日、グアイド氏らが閉め出された状態で国会議長選が実施され、同氏の政敵であるパラ議員が新議長に「選出」された。

5 日、カラカスのベネズエラ国会で議長への就任を宣言する野党のパラ議員（A F P 時事）

グアイド氏を支援する欧米諸国が反発し、ベネズエラ政情の混迷が深まるのは必至。反体制派議員らは別の建物で投票を行い、同氏を「再選」した。



またまた、「独裁者」マドゥーロが、憲法、民主主義を踏みにじり、民主主義の復活を推進するグアイドーを弾圧したという報道です。これらは、取り分け岡田氏の記事は、1月6日付けのロイター電、Luc Cohen、Manaure Quintero、Alexandra Alperの3本の記事にその出所を見ることができます。しかし、国民の85%から見放されているグアイドー氏が国会で議長を再任される見込みはあったのでしょうか（拙稿、2019年12月31日「ベネズエラ、野党の現状」参照）。事態の真相はどうだったのでしょうか。

ベネズエラの中道保守系のグロボビシオン紙、中道のウルティマス・ノティシアスの記事を参照すれば、事態は次のように進展したようです。

1月5日は、国会の新指導部が選出されることになっており（憲法第194条）、与野党の国会議員167人のうち、151名が出席しました。国会の定足数は3分の2、112人ですので、定足数を満足させ、成立しました。野党議員の中には、現在もマドゥーロ政権と熾烈に言論戦を戦わしている、スターリン・ゴンサーレス（新時代党）、ラモス・アジュップ（民主行動党）、フアン・パブロ・グアニパ（正義第一党）などの有力な指導者も出席していました（20.01.05 Ultimas Noticias）。グアイドー議長（過激派の大衆意志党）は、国会で再任されないと思っていたのか、欠席しました。そこで議長が不在なので、国会議員の中の最年長のエクトル・アグエロ議員（ベネズエラ社会主義統一党）が慣例に従い、新指導部リストを提案しました。

そのリストは、国会議長ルイス・パルラ（正義第一党）、第一副議長フランクリン・ドゥアルテ（キリスト教民主党）、第二副議長ホセ・グレゴリオ・ノリエガ（大衆意志党）、書記ネガル・モラーレス（民主行動党）、副書記アレクシス・ビベネス（大衆意志党）でした。主要野党がすべて網羅されていました。投票では、81人が賛成し（そのうち野党議員は30人）、規程の過半数76名を越えていましたので、選出されました。国会は、新旧指導部の交代式を行うため、2時間ほど、グアイドー前議長の出席を待ちました。他の旧指導部はグアイドー前議長を除き、全員出席していました。したがって、国会側が、グアイドー氏の出席を拒否したわけではありません。

しかし、新国会議長が選出されたことを知った、米務省のマイケル・コザック西半球局次官補代行は、すぐさま、「国会の開催は、定足数不足で、偽物であり、グアイドーは引き続きベネズエラの暫定大統領である」とツイートしました。このコザック発言に勢いづいて、グアイドーは、国会の正門から入らず、鉄柵を乗り越えて議会に入ろうとし（右写真）、警備隊に阻止される劇的な場面を作ろうとし、何度も鉄柵を乗り越えようとしていましたが、当然それは果たせませんでした（20.01.06 Página 12）。



演技が終わったグアイドー氏は、午後5時半から、保守系新聞「エル・ナシオナル」紙の建

物内で「国会」を開催し、100名が出席し、グアイドー（大衆意志党）を議長に、フアン・パブロ・グアニパ（正義第一党）を第一副議長に、カルロス・エドゥアルド・ベリスベイテ



ィア（ベネズエラ計画党）を第二副議長に選出しました（20.01.06 El Universal）。この指導部には民主行動党、キリスト教民主党などの有力な伝統的な野党が参加しておらず、グアイドー氏の勢力の狭さがここに見られます。この100人には、国会議員でないものも含まれているだけでなく、100名では定足数に不足しています。また国会外

で、国会が開催され人事が決定さるというのも無法なやり方です。とても適法的な選出とはいえません。

新国会議長のパルラ氏は、「ベネズエラ政府と対決する野党であることを確認しつつ」、野党に、「国で制度を復活させ、立憲主義に立つ、自主独立の国会を復活させ、憲法にある権限と責務を完全に尊重するよう」呼びかけました。こうした建設的な野党の存在を大多数の国民は期待しており、与野党が激しくはあるが健全な議論を通じて、経済を再生することを望んでいるのです。一方、対照的にグアイドー氏は、自らの権力維持の野望とマドゥーロ政権打倒のみを訴えており、到底、大多数の国民の支持を得るものではありません。世論調査の結果は、今回の国会議長選挙で、そのことを証明したのです。

（2020年1月6日 新藤通弘）